

原告第一主義を誓った日

古川 雅基

(在韓軍人軍属 (GUNGUN) 裁判の要求実現を支援する会)

在韓軍人軍属 (GUNGUN) 裁判とは、2001年6月に韓国人が日本政府を相手取って東京地裁に提訴した戦後補償裁判のことである。在韓の日本軍人軍属として動員された生存者・遺族が原告で、請求趣旨は「生死確認」、「遺骨の返還」、「未払い金の返還」、「BC級戦犯に係る損害賠償」、「シベリア抑留に係る損害賠償」など多岐にわたった。252名(その後追加提訴で計414名)という大規模な訴訟ということもあるが、「靖国合祀を絶止(取り消し)せよ」という請求を柱に掲げた事がマスコミの注目を浴びた。

GUNGUN裁判の提訴は東京であるが、それをサポートする体制は大阪で準備された。2001年当時、90年代に提訴が相次いだ戦後補償裁判の判決が既に多く出されていて、「権力中枢に近い東京より地方の判決の方が有利」と発起人の金景錫(キム・ギョンソク)さん(日本鋼管訴訟原告で勝利和解、GUNGUN裁判・不二越訴訟の陣頭に立った)が大阪での提訴を希望したからである。結果的に大阪に関連する原告がほとんどおらず、東京地裁に移送されることが予想されたために東京での提訴になった。その関係で支援する会の役割分担も、弁護士や裁判所との連絡など法廷対策や対政府交渉は東京で、ニュース発行やホームページの運営など運動を広げる分野は大阪で行うことが自然に決まっていた。大阪と東京の移動は大変だったが、パソコンが普及し始めたおかげで、インターネットを通じて文書や資料のやり取りが容易になったのは幸いであった。

私がこの裁判に関わるきっかけは2000年に大阪での集会で、ゲストで招かれた金景錫さんにお会いした時に直接依頼を受けた。「私は今まで戦後補償裁判を闘って一定の結果を出してきたが、一つだけやり残したことがある。それは軍人軍属の裁判だ。軍人軍属というと戦後韓国社会の中では日帝協力者とみなされ肩身の狭い思いをしてきた。韓国には今でも徴用された20代の夫の姿を追って帰りを待ち続けているおばあさん達がいる。ぜひ引き受けてもらえないだろうか」。そしてその年の秋に春川を訪れ原告予定の方から証言を聞き取った。

韓国の原告団体は、金景錫会長(当時)の「太平洋戦争韓国人犠牲者遺族会」(春川)と、李熙子(イ・ヒジャ)共同代表(現在)の「太平洋戦争被害者補償推進協議会」(ソウル)。

年明けから韓国から原告の陳述書が次から次へとファックスで送られてきた。多いときは家に帰ると部屋がロール紙で真っ白になっていた。届いた陳述書を関西のスタッフが手分けして知り合いに翻訳を頼み、出来上がると日本語をワープロ打ちする毎日が続いた。多くの被害者が原告になることを望んでいることが実感できた。またワープロを打ちながら北はシベリア、南はニューギニアまで被害者のエリアが広範にわたることも認識できた。日本軍の作戦拡大に伴って、朝鮮半島から動員され戦地配備された事実が陳述書から伝わってきた。裁判準備と同時に日本の近現代史を勉強することになった。

2001年5月私たちは弁護団と一緒に訪韓した。原告集会に参加するためである。山と湖が美しい春川は、韓流ドラマ「冬のソナタ」で有名になったが、当時は日本人が歩くことは珍しかった。100人近い原告を前に裁判の説明をした後、原告から意見が相次いだ。通訳を通じてであったが、「今までなぜ放置してきたのか」という「日本」に対する痛烈な批判の声が私たちに向けられていることを感じた。一方で「だからここの人達は私たちのために来てくれたんじゃないか」という声も出され会場は騒然とした。その時、太く通る声で一喝して議論を終了させたのが金景錫さんだった。今から考えると良くも悪くもカリスマ性のある人だった。原告集会の持ち方はソウルと春川は対照的だった。会員同士が自由に討論し合うソウルに対し、春川は金景錫さんが最後は半ば強引に結論づけた。今思えば、その強引さも判断材料の少ない多くの原告からすれば頼もしかったのではないだろうか。その原告集会の後、大口昭彦弁護士と一緒に金景錫さんが自費で建築した「強制連行被害者納骨堂」をお参りした。夜、ホテルの部屋で飲みながら大口弁護士は熱く語った。「古川さん。あの夥しい数の遺骨こそ日本人が見なければならぬものだ。ここに来てよかった」と。

提訴直後の7月、沖縄で開催された集会のゲスト招致を巡って金景錫さんの怒りが爆発したことがある。「春川にも原告がいるのに無視するとは何事か」と。こちらが春川には沖縄戦関連の原告がいないと判断したことへの怒りだった。急遽、東京の御園生さんと一緒に春川に向かった。誠心誠意こちらの考え方を伝え、至らなかつた配慮を詫び、意見を交換した。提訴準備に追われて、金景錫さんと腹を割った意見交換ができていなかった私たちにとって非常にいい機会だった。私はそれまで思っていた提案を金景錫さんにした。「納骨堂を見て感銘を受けました。ぜひ納骨堂の草刈りを日本人の手でやりましょう」「それはいい提案だ。草刈りだけではもったいないのでサッカーをやれば」「それはおもしろい。ぜひ若い人を募って韓日市民のワールドカップをやきましょう」とんどん拍子に話は進んでいった。それがその後10年間続く「草刈りボランティアツアー」のきっかけだった。(納骨堂は春川市の都市計画によって2011年に天安の望郷の丘に移転した。)

金景錫さんは私にとって尊敬の対象である一方、スポーツ、カメラ、釣りなど趣味の合うハラボジだった。美空ひばりが大好きでCD全集をプレゼントした時は、朝からワインを出してきてCDを聞きながら一緒に歌った。金景錫さんにとって「日本」とは、家族を分断し、自らを強制連行し痛めつけた「対決の対象」であるけれども、実のところは誰よりも日本びいきだった。日本語が堪能なことからハム無線を通じて日本人と友達になったり、家ではよくNHKの衛星放送を見ていた。そんな金景錫さんから教わられたのは人との接し方である。「相手を尊敬すること。そうすれば相手から尊敬される」。言葉で教わったわけではないが、金景錫さんの行動や言動から私にはそう伝わった。金景錫さんは06年5月26日帰らぬ人となった。グンガン裁判の地裁判決が出た翌朝のことだった。判決を待って死ぬところが金景錫さんらしいと思う。

支援する会として、韓国原告との直接交流が何より大切だと考え、上記「ボランティアツアー」をはじめ、「原告証言を映像に残すツアー」などを積極的に展開した。私は今でも韓国語がダメで、原告との深い交流は通訳なしでは不可能だが、当初の交流では若い留学生に通訳ボランティアとして助けていただいた。日本人に対する怒りや不満を一番に受ける立場に立った彼らはどう感じていたのだろうか。以

下は2002年7月の証言ツアーに通訳参加した丁智恵さんと奥田幸治さんの感想（ニュースNo.13）である。

丁さん：「聞き取り調査で感じたことは、まず、生存者の方と遺族の方との認識のギャップです。生存者の方々は皇民化教育を受けていたので、今でも日本に対する気持ちは愛憎入れ混じる複雑なものではあるものの、例えば日本人の戦友の話になると大変懐かしいような気持ちになったり、日本の歴史人物に対して尊敬を抱いていた（ちなみに金智坤さん：生きながら靖国に合祀されていた方：は徳川家康についての本を10冊ほど持っておられました）、一通りでない感情を抱いておられました。生まれてから二十歳過ぎまで日本人としての教育をびっちり受けてらっしゃったわけですから当然のことです。過去のことはどうしようもない、未来に向けて韓日が仲良くやって行ってくればそれが本望だ、というのが共通のお気持ちであるようでした。生存者の方が本当に高齢であられるので、なんでこんなに時間が経ってまで日本政府は何もして来なかったのかという、歴史を封印しようとしてきた日本政府に対する怒りと、急がなければ間に合わなくなってしまうという焦りも感じました。もしこの方たちが亡くなられたら、日本政府にとっては本当に侵略戦争はなかったものとして封印されてしまう、だからこそ1日でも早く裁判を成功させなければならぬんだ、そして生き証人である彼らの生の声を映像に残さなければ、と感じました。」

奥田さん：「もともと戦後問題に詳しいわけではありませんでした。昨年11月のサッカー親善試合ツアーに参加したのをきっかけに、少しでもお手伝いできればという思いから翻訳作業をし、今回の聞き取りツアーにも通訳として参加させていただきました。通訳をしながら、生存者、遺族の方の心の中の叫びを感じました。最終日、原告集会が終わってから遺族の方達と一緒に話をする機会があり、その中で忘れられない一言を聞きくことができました。「私達韓国人の心の中には未だに解かれない心の叫びがある。それを解くためには韓国人、日本人のお互いの'対話'が必要だ。そして一緒に歩もう」と。たとえ自分達の世代がだめでも次の世代の人たちが引き継ぎ、最後まで'対話'して欲しいという想いが伝わってきました。一言でも言葉が通じればお互いが理解しあい、良い感情が生まれてくると思います。今後通訳という作業を通して日韓友好の架け橋を作るお手伝いできましたらと思いました。」

こうした若い力に支えられながら、GUNGUN裁判を支援する体制が広がり、その後、今につながる日韓市民の信頼関係を築いていくことができたのである。

手探りで始めた支援する会の活動だったが、原告たちとどういう姿勢で接するか決意づけたできごとがあった。先の金景錫さんとの回想で書いた2001年夏の沖縄集会にゲストとして招かれたのは、原告の権水清（クォン・スチョン）さん。父が沖縄戦で戦死したと推定される遺族である。陸軍軍属として徴用され、沖縄の特設水上勤務第104中隊に動員された。お父さんと共に動員された人の話では洞窟に行く途中に爆弾が落ちて死亡したということであるが、記録上は生死不明のままである。県民の4分の1が戦火に巻き込まれ命を失った島、沖縄。多くの朝鮮人や慰安婦もその激戦地に駆り出されたが、実態は未だ闇の中だ。一家の大黒柱を失った後、母親は病死。弟の面倒を見ながら9歳の権水清さんは働きながら韓国各地を転々とする。気がつけば60歳。父の記録を探すために遺族会活動を始めた。このとき韓国から祭祀用に果物やお酒が入ったダンボールを準備しての沖縄入りだった。父が戦死した地を

初めて踏んだ権水清さんは、「韓国の塔」の前で念願の祭祀をやり遂げる。そして終了後、権水清さんは泣き崩れた。ホテルで同室だった私は、前日は言葉が通じないこともあり、ほとんど話せずにいた。しかしこの日は二人でお酒を飲んで、一緒に身振り手振りで語り合った。忘れられない一夜になった。原告の抱える辛い苦しい歴史に寄り添っていきたい。「原告第一主義」を支援する会の柱にしようと思つた出来事だった。

GUNGUN 裁判を通じて原告と接していて痛感するのは、戦争責任のある日本人が戦後、朝鮮半島に戻った人々に思いを馳せることがいかになかったかである。日本人の場合、52年サンフランシスコ講和条約で日本が主権を取り戻して以降、「戦傷病者戦没者遺族等援護法」（これが靖国合祀のキーワードになるのだが）の恩恵で経済的に補償を受けた。その金額は戦後の累計で50兆円にもなると言われる。一方、朝鮮半島では一家の大黒柱を失い、その後の朝鮮戦争で家族が離散し、社会の荒波に放り出された子供たちも多い。どんな仕事でも夢中でこなし戦後を生き抜いた。民主化運動を経て、初めて自分の父親がどういう理由で日本に動員されて、どういう状況で死んだのかを知りたいと思ひ、遺族会に加入した原告たち。父の死んだ地に立った遺族の「アボジー！」という慟哭に、これまで接するたびに胸が締め付けられた。戦後、放置してきた日本人の責任として、原告の思いを叶えてあげたいと思ひを新たにしてきた。

裁判は「日韓請求権協定で解決済み」という論理で敗訴したが、「靖国無断合祀」や「遺骨問題」は現在も続く課題であることから、支援する会は継続している。今、「徴用工問題」で日韓が対立させられているが、家族を亡くした「痛み」に国境はなく、遺族同士理解しあえる。私たちは、今後も「痛み」を共有し、お互いが尊敬しあう日韓市民同士の関係を広げたい。